

発刊によせて

宇都宮大学教授（元文部省視学官）

奥井智久

私の敬愛する友人、竹中良行先生が自著「やっぱり理科は面白い」を上梓されることになった。先生から送られてきた本書の内容を読んで、これはまさしく竹中先生の人生と主張を熱意をもって伝えようとする自伝の書であると実感した。

「人生は小説より奇なり」という譬えがあるが、学校教師であった父に付き従って奈良県内の各地の学校を転地しながら地域の自然や友達に学んだ少年時代、奈良学芸大学卒業後、小学校・中学校の理科教師として児童・生徒を理科好きにするために鋭意努力を重ねられた青壮年教師時代、県教育委員会理科担当指導主事並びに小学校長として奈良県の理科教育の振興に寄与された熟年時代、そして短大付属高校理科教師として今尚生徒の理科への関心を高める努力を重ねておられる現在まで、その人生には様々な有為転変が窺える。だが、その人生は一貫して理科教育、子どもを理科好きにする教育に向けられ、本書では、その成果と優れた教育方法が先生の経験を基にして説得力のある形で語られている。

例えば、本書に述べられている、自然に触れる、思い巡らす、働きかける、考えを組み立てる、自ら科学する、といった原則は、理科を好きになる普遍的な原理と言える。その際、どんなものでも「面白そうだ」と若干の野次馬精神と好奇心をもって自然事象に接近してみる積極性、「あなたはそう言っても私の考えは違っている」と納得のいくまで観察や実験、製作、論争等を繰り返して工夫し、実証・検証す

る態度は科学する者の基本となる姿勢である。

私は、1970年代後半から90年代の前半にかけて、文部省で全国の先生方と共に理科教育・科学教育の振興について考え、その実務を担当していた時期に竹中先生と知り合い、先生が理科教育にかけてこられた情熱と実績に触れることができた。その理科教育人生のエッセンスともいうべき本書が、多くの同好の先生方に読まれ、日本の未来を拓く理科・科学好きの若者を増やすことにつながれば、こんな嬉しいことはない。

本書で語られた「竹中節」とも言うべき先生の考えと実践的方法が、着実に奈良の地から全国に輪を広げ、理科好きの先生と児童・生徒を育てることを心から願っている。

平成 11 年春